

史跡 旧島松駅逦所保存修理工事報告書

平成三年三月
広島町

以上、若干の問題が残るにせよ中山家所蔵の古図（資料8）は、明治十四年明治天皇島松御昼行在所新築に関する書類「奉願書」の添付書の一部と考えて誤りはないであろう。

今回の保存修理では、駅通正面道路側土間（通り庭）と行在所右側（ハス池側）の土間が鈎手（L字形）になっているところで一本引きの板戸を復原した。この建具はいづれの図面にも表現されていないが、柱等に残る仕口から何らかの理由で取付けられたと推定される。しかし、いつの時期かは不明であるが行在所新築の年代ではないらしい。

行在所正面道路側の土間に「板處」とあるのは、天皇が土間を渡り御座所に入場するために置かれたものと考ええる。また、古図の土間及び廊下が行在所と境する部分に実線を用いて区切っているのは、後側の引戸による区切りと同じく、行在所を一時的に仕切ったと考える。

二、まとめにかえて

最後に、島松駅通所建物について建築年代に関する推論を含め、若干の問題点をさぐってみたい。

建物の一部解体途中の所見と、古図、道指定時復原図との比較において、資料8で区分けした第二区と第三区に関しては、明らかに第二区に第三区を新築したことを構造的な取り合い関係を見ても明確に説明できる。しかし、第一区と第二区については、桁、梁及び柱位置、小屋組の継ぎ方に疑問の余地がみられた。そして、第一区の柱軸方向が第二区の柱軸方向と合わず、軸角度が折れていたこと。しかし、今までのどの図面にもこの事を忠実に表現していない。いづれの建物平面図もこれらの問題を概念的に整理して作図しているように思える。

中山久蔵は、最初島松川の南側（右岸）にあったと思われる植田甚蔵所有の

勇弘会所小屋一棟を五円で購入したが、無人の荒屋だったといわれている。筆者の推定では、島松川の右岸は敷地的に農業を行うほどの余裕がなく、既に他の建物等もあったので右岸の生活は最初から仮住居と考えていたのではなからうか。従って島松川の左岸（現在地）に転居する明治六年（一八七三）までには、おそらく明治四年頃（^年）から開墾に従事しながら永住のための家づくりを始めたとしても不自然ではない。その最初の住居は、資料8の第一区にあたる場所に建てたのではなからうか。（板の間、流し場等を中心とした建物）そして明治七年（一八七四）以降に第二区部分を建築し（主に座敷か）ほぼ一体化したとみてよい。この時に若干のずれが生じたと考えられることもできる。

明治七年以降に中山久蔵が建築したとする裏付は、資料11に示す資料（中山家所蔵）である。内容は、千年（歳）郡漁村山中から椽角（一尺×八寸）二間、三十本。雑木角（五寸）二間、五十本。雑木角（六寸）二間、二十五本分の伐木を許可するという文書で、明治七年六月勇弘出張所から出されている。勿論この材料だけでは建築できないが、第二区を含めた住宅がこれらの新材をもとにして建築された（あるいは始まった）と考えてよい。

この第一区、第二区の建物位置について、古図を点検すると建物左側裏口から約三メートルのところに井戸の位置が示されている。この井戸は中山家の説明では明治当初から変更していないという。御膳水として用いられた井戸で現在も使用している（中山家）井戸である。ここに一つの絵図がある。明治六年（一八七三）箱館と札幌を結ぶ札幌本道（札幌新道ともいう）が完成したが、この時にかかれた「札幌新道出来絵図」（資料12）（北海道大学所蔵）をみると、中山久蔵住宅左側柵田の中に井戸と思われる描き方をしている部分がある。住宅と井戸との間は僅かしか離れていない様子にみえ、殆んど軒先にあるかのごとく描かれている。この絵図は鳥瞰図であるから概念的に記録されているとしても、井戸が建物から離れた位置にはないという認識の上で描かれたと思う。

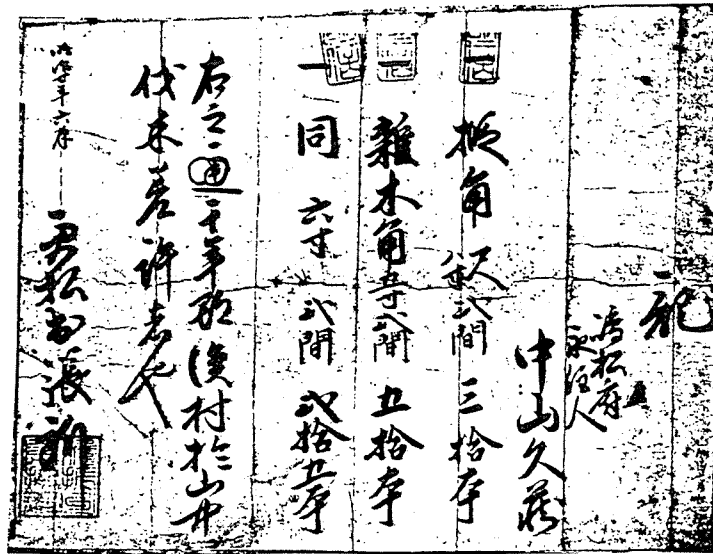
資料 11 伐木許可書

(刻印) 椴角 八寸貳間 三拾本
 (割印) 雜木角 五寸貳間 五拾本
 同 六寸貳間 貳拾五本
 右之通千年(歳)郡漁村於山中
 伐木差許者也

明治七年六月勇弘出張所

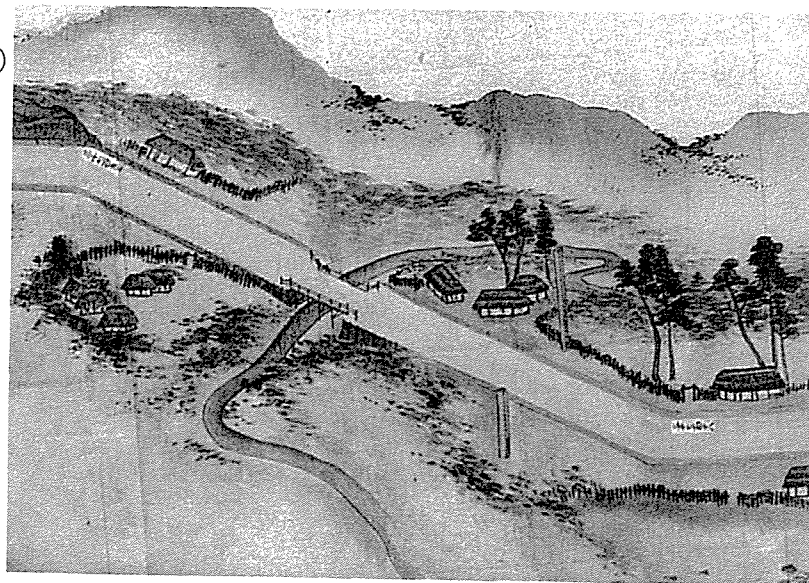
胆振國
 勇振郡

記
 嶋松府
 永住人
 中山 久藏



資料 12

札幌本道出来絵図 (明治 6)



後記

本事業は、積雪による建物の倒壊を防ぐため、向寒の十一月、小雪の舞う中で素屋根建設から始まった。

当初計画は、屋根替えを主とする揚屋程度の方針であったが、途中、現存駅通所としての復原のみでなく、道央稲作普及の祖である中山久蔵の地として、また、札幌農学校（現北海道大学）外人教師クラーク氏と生徒の送別の地としての周辺環境整備や防災施設の充実等をも実施することとなり、予算も工期も大幅に増大し、七年余の長期間となった。その間には理事者の交替や担当職員の変動等もあったが、大禍なくここに竣工を迎えられたのは、御同慶である。ここで、本工事施工に従事された諸職の技能者の内、㈱亀田工業の現場代理

人や棟梁以下大工の人達は、プレハブ建物で寝食し、冬には寒さに震え、夏は飲めない井戸水と蚊に悩まされながら塵埃の中補張しつつの解体から竣工まで頑張っていた。その御苦労を再度紹介するとともに諸職の技能者の方々に改めて敬意を表したい。

最後に、事業の期間中、指導助言ばかりでなく、諸般の事情から本書の一部執筆からまとめまでの労を取って下さった遠藤龍敏氏、印刷を引き受けて下さった㈱北海道機関紙印刷所の中江勝洋氏、また、御協力下さった諸氏に、深く謝意を申し上げる。

高原 孝

史跡 旧島松駅通所保存修理工事報告書 平成三年三月

編集 財団法人文化財建造物保存技術協会（東京都港区虎ノ門二丁目八番一〇号 第一五森ビル内）

発行 広島町（北海道札幌郡広島町字広島六十三番地）

印刷 ㈱北海道機関紙印刷所（北海道札幌市北区北六条西七丁目一番地）